



津村喬



(ほびっと村学校・気談倶楽部主宰)

昔は草や石が物を言っていて、うるさくてしかたなかった、と『古事記』には書いてある。正しい国語が普及したので草や石は騒がなくなったと。

草や石はヤマト国家に征服された先住民の象徴であるだけではない、と思う。先住民たちは本当に草や石と話ができたのではないか。左脳ばかり発達させて文字や道具を作った人たちが来て、草や石と一緒に夢を見るこ

とがむずかしくなった。「気」というのは、草は草であるだけでなく気でもあり、人間も人間であるだけでなく、気でもあるから、一緒に夢見ることができるという意味である。ほびっと村の気談倶楽部でそれをいろんな角度から考えているサワリを、ここに再現してみたい。

レーニン『何をなすべきか』という本で「新聞をつくろう」と「夢を見よう」ということをよびかけた。彼は新聞は作ったが、ジョーモン人のように夢見る力はなかった。あばっちが新聞を作るというので、夢の見方を一緒に考えてみたいと思っているのだ。

鶴田静



(エッセイスト)

この困難な時代を予見して十数年前に出たミニコミ誌の先駆『名前のない新聞』が、再び登場するべき時が来た。この間試行錯誤してきた私もまた、今度こそは理想を実現す

室田武



(水車むら会議顧問・一橋大経済学部教授)

水車むら会議の一員として8月のいのちの祭りに参加して、エネルギーティビに灯をともす水車発電機、それからもっと山の上のほうにあった粉ひき用の水車とか、広場にあった木炭ガス発電、それらの大まかなコンセプトを出しました。でも結果的には、私としても非常に不十分なことしかできなかったの、この新聞では本当に実用に耐えられるようなソフトエネルギーのやり方について、少しずつ考えてみたいと思います。

左側が小泉金吾さん



新住区千歳平を私は車でまわった。静かだ。人影もまばら、老婆が一人小さな庭いっばいに畑造りをしていたのが印象的であった。

新納屋にいまにまだに住み、この地区で「開発」「核燃」とただ一人闘い続けている小泉金吾さん(59)に会うことができた。この方以外、新納屋部落には誰もいない。みんな新住区へ、青森市へ、三沢へと移転していった。小泉さんは言う。「わしは新納屋から出ていきたくない。元々は明治6年にここに入植し、漁をしていた。わしも若い頃はイワシをとり、イワシ油を作っていた。電気もなく、イワシ油が入ったランプの灯りだけで生活した。タニがいっばいで本当に大変な時代だった。その後、漁がだめになり、百姓になった。自分の手で畑を造り、朝暗いうちから夜遅くまで働いた。米はどんなに頑張っても普通の4割~5割しかとれない。商品にもならない時があった。『巨大開発』はこういう弱い所をねらった。開発は住民のためと口

で言っていたが、何一つわしらの事など考えていなかった。政治はわしらをうまく利用した。わし一人になっても闘い続ける……。日本中がいやがる核燃を、なんでここに持ってくるのか。核燃ではしゃくな。原発をとめろ。あんたら核燃で今さら騒ぐな。わしらの闘いは20年もやっている。もはや執念だ。」

生活の苦しさを利用し、巨大開発は六ヶ所村に入り込んだ。むつ小川原開発は住民への対策を何もせず、政治家たちは自分の身を守るためだけの政治を行なった。そしてあげくの果てに核燃を持ち込まれてしまう。ここまでにこの地をいじめつくすこの国は、いったいどういう世界であろうか。小泉さんは20年

間の執念の闘いを一言一言、怒るように語り続けた。また語りつくせない想いを、手振り身振りで私に見せてくれた。その言葉は、今もなお私の耳に残り続けている。

小泉さんはただ一人の神楽を伝承する人であるが、今は舞うことすらないと寂しい顔をしていた。

縄文の時代より、この地には人間の歴史があった。厳しい風土と闘いながらも自然の恵みを大切に、生き続けてきた。緑豊かな大地と美しい湖……。しかし今その歴史は終わろうとしている。

下北の山背よ、大いに吹き荒れろ。

原木寸庄三良(満月洞マスター)

### 青森県農協大会 先送りになった核燃反対決議

さる10月14日、核燃サイクル基地計画のうちのウラン濃縮施設の着工が抜き打ち的に行なわれたが、地元青森県農協などの動向が今後のカギを握るものと注目されてきた。

11月22日、若い農業者達を中心になった核燃料サイクル施設建設反対の総決起集会在開かれ、1900名の参加があった。来賓の姥名中央会長は「核燃施設は迷惑だが、建設阻止には全国に反対運動の理解者が広がる必要がある。農協としても出来るかぎりの支援をしたい」と反対の姿勢を明確にした。

11月25日、青森県農協大会が開かれ、核燃反対決議が出された。拍手の量は反対派に対

するものが圧倒的だったが、六ヶ所村農協組合長が反対決議却下の動議を出し、会場は混乱状態となった。運営委員会は休憩を宣言した10分後、「大会で決議せず、組合長会議で決着を図る」事を提案し(これが筋書き通りだった事は後に報道陣に流れた内部メモから露呈する)、突然閉会を宣言してしまった。

結局、核燃反対決議だけでなく、一つの議案も決議できないという異例の大会であったが、核燃に反対する農業者団体や、県下の農協からの抗議と大会再招集の要請が相次ぎ、中央会では対応に苦慮している。

しかし、大会出席者のうち青年部などは2割にも満たない中で、反対決議を支持する声は圧倒的に大きかったことは、公式の場では初めてのことであり、今後、漁協など各方面に与える影響は大きい。(滝本)